

コラム

「原子力輸出の機運を高めよう」

客員研究員 新井 光雄*

やんぬるかな。こんな言葉がある。手元の辞書（小学館 国語大辞典）で調べてみると連語で「今となってはどうもしかたがない」というような意味となる。どうしたことか古い広辞苑（第一版）にはない。それはどうでもいいことなのだが、今、日本の原子力に関連して使ってみたくなった。原子力輸出プロジェクトのふたつの頓挫に関連してのことである。これに関連しては一度、UAEプロジェクトの日本敗退に関連して指摘したが、これに続いてベトナムプロジェクトもほぼ日本敗退となり、ようやく事態急という雰囲気になってきた。「やんぬるかな」に「やっぱり」の語彙ありか、と誤解していたので、この言葉を使いたくなり、辞書を参考に見てみた。本意は「絶望」だから、そこまでではまだない。しかし、政府などのこの問題への対応はいかにも泥縄、手薄というほかない。それに、スピードを以ってする新聞、テレビなどの反応も鈍かった。UAEでの敗退の段階では深刻に大ニュースとして伝えているところはほとんどなかったのではないだろうか。

そこへベトナムでの敗退が重なり、ようやく「これは問題」という意識が出たのだろう。政府も、メディアも足並みを揃えるようにして「大変」を言い出した。遅い。原子力プロジェクトは十年、二十年のタームで進めるものだ。その間にいかに地道な商戦を展開するかが大きな鍵となる。それも総力戦。このことがようやく政府にも分ったようで、今更ともいえなくもないが、鳩山首相はベトナムに親書を送る。UAEには電話をしていたということだから、一歩進んだのか、電話の方がいいのか、判断に迷うが、親書にはかなり突っ込んだ内容が盛り込まれると報道されているから、明確な原子力輸出の政府方針がようやく示されたものと言えるのだろう。その要旨は①日本・ベトナム原子力協定の早期締結②日本に原子力輸出の新会社設立一などが盛り込まれる。どれも結構なことだから、異論などないのだが、いかにも遅い。原子力メーカー側は早い段階から一定の政府関与を要望していた。それに政府もおずおずとながらも、協力姿勢を見せてはいた。全面否定するつもりはない。前にも書いたが、当方もベトナム原子力代表団の来日の際に「日本のメディアと原子力」ということで講演をさせてもらったことがある。協力をしたという大袈裟なことでは全くないが、多少関与したという個人的な思いがあった。

従ってUAEはともかくベトナムは是非、と期待していただけに、敗退は多少とも衝撃だった。相手はUAEが韓国、そしてベトナムがロシアだ。問題点は明確。多くの指摘がある通りで国・政府の関与の度合い。敗退はしたがフランスもこの点ではライバル。日本を除き、国を挙げての総力で臨んでいるというのに、日本は言ってみればバラバラ。小ぶりの対応はそこそこにやってきたとは言え、国の意思としてという姿は見えてこなかったことは否定できない。日本は企業を含めてトップ・セールスが下手だ。政府はお上として協力の姿勢程度は見せても、そこに留まる。一歩先に出ることはない。いや出られないのかもしれない。確かに、今回のような巨大プロジェクト

* 地球産業文化研究所理事 元読売新聞編集委員

には巨額な資金が動く。それに絡んで不祥事が発生しないとも限らない。ちょっと言葉がきついが疑獄事件のような事態も内包している面があるかもしれない。

しかし、欧米の首脳の国際行動をみていると、その周囲には経済界からの有力者がつきまとうかのように存在している。まるでそれが当然というように自然に。これが日本ではなかなか出来ないできた。最近でこそ、そうした形の大臣クラスの外遊も時に見られるようになってはきているが、まだまだ欧米レベルには到底、達していない。象徴的なのは欧米を模範としたのだろうか、UAEと韓国の調印では両国の大統領がそろって式に臨み、握手を交わしたという。どう考えても、仮に日本受注だったとして鳩山首相がUAEに赴くということはあるだろうか。まず、ないだろう。たかが原子力輸出となってしまうのではないか。仮にだから検証のしようがないが、やはりこんなところに日本の敗因がひそむと見るべきだ。

「政官民の癒着」を警戒する雰囲気は根強いことは分る。十分に注意していくべき問題だが、今後もひとつの国際戦略物資ともいえる原子力などでは、そうした懸念でしり込みしては展望が開けなくなってしまう。政府は大胆にそして注意深く関与していくべきだ。いやそうしなければならぬ。むろん今回の敗退要因を冷静に日本に不可能な廉価輸出、長期運転保証、軍事協力といった点に求める向きがある。これらの側面は十分に検討の余地があるのかと思う。しかし、これを単純に認めてしまえば、日本の原子力輸出は未来永劫、不可能の烙印が押されてしまう。何か工夫はないのか。日本の原子力技術は世界最高の水準と日頃、主張しているではないか。活かす方法はないのだろうか。門外漢の思いつきかもしれないが、政府の関与はすくなくとも可能なはずだ。まずは出来ることをしっかりやっていくほかない。ベトナムには二期原子力プロジェクトの二基が残っている。これは日本優位といううわさもあり、それを信じたいが、手をこまねいては、敗退再びとなりかねない。

親書は問題打開の第一弾。後ろ押しになってくれる面があるにはあるに違いない。遅きに失したという気がするが、今、それは言うべきではないのかもしれない。関係大臣の発言なども政府関与に前向きであり、ここは期待もしておこう。万難を排しても、とまでは言わないが、是非とは言っておきたい。原子力委員会も一応、その方向での検討を開始している。この機運を盛り上げていくべきだ。

関連して気になるのが、地球温暖化対策基本法の行方。このなかに原子力を盛り込むかどうか話題になってきている。どうやら形だけに入る方向のようだが、文言、長さなどの細かなところの議論がある一方、原子力反対の社民党がぶつぶつ言っているようでもある。是非、これもきちんとした位置づけを法案に盛り込んでほしい。広い意味での対ベトナム原子力輸出の支援にもなるはず。環境と原子力の結び付きは国際的なアピールにもなる。プラス材料だろう。

日本の原子力はプルサーマルの展開などの面で徐々にだが動きつつある。「やんぬるかな」が「もはや絶望」を意味するとなれば、原子力輸出についても、今、それを言うのは明らかに早すぎるのかもしれない。暫くは禁句としておくことにしたい。いや、使用することがないよう願おう。

お問い合わせ：report@tky.ieej.or.jp